

## 祈りの3つのタイプ

□ 「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□ 「祈りの3つのタイプ」のアウトライン

1. 個人的な祈り
  - (1) マタイ 6 : 5~6 人に見せる祈り 対 正しい祈り
  - (2) 祈りの基盤
  - (3) 神のことばとの調和
  - (4) 「願う」と「ゆだねる」とのバランスについて教える聖書箇所
  - (5) 怒りや不満を含む祈りは受け入れられるのか？
  - (6) 個人的な祈りの手本
2. 集会での祈り
  - (1) 使徒 1 : 14
  - (2) 使徒 4 : 23~31
  - (3) 使徒 12 : 5、12~17
  - (4) 使徒 16 : 25
  - (5) 使徒 20 : 36
  - (6) 使徒 21 : 5
  - (7) 使徒 27 : 35
  - (8) 集会での祈りで、避けるべき10のこと
3. 終末期とメシアの王国における祈り
  - (1) 現代の信者が祈るべきこと=携挙についての祈り
  - (2) 大患難期前半期において信者が祈るべきこと=イスラエル民族の避難について
  - (3) 大患難期後半期において信者が祈るべきこと=メシアの再臨について
  - (4) メシアの王国の時代における祈り

注：終末期とは、メシアの初臨からメシアの王国に至るまでの時代のこと。聖書ではメシアの王国は「次の世」。終末期は、この世の「終わりの日々」（ヘブ 1 : 2）である。

## 祈りの3つのタイプ

### 第一 個人的な祈り

#### 1. マタイ 6 : 5~6

- (1) 5節 人に見せる祈り
- (2) 6節 正しい祈り

#### 2. 祈りの基盤

- (1) 聖書の中に明確に述べられた命令に基づいて祈る
- (2) そのような命令の箇所として、次の3か所

##### ① マタ 6 : 9~15

- 6 : 9~13 は、いわゆる「主の祈り」。この中で、信者が祈りの中で神の前に言い表すように命令されているのは、12節の赦しである。「私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」
- そして、それが6章14~15節につながる。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」
- 波線部は、救いを失うということではない。神との交わりができなくなるということである。自分に負いめのある人を赦さないことは、自分の罪である。この罪を処理しないと、父との交わりを継続することはできない。自分に負いめのある人を赦しますという祈りを先にして、その上で次の祈りに入ること、これは神の命令である。

② ヤコブ 1 : 5 「あなたがたの中に知恵が欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」

③ Iヨハ 1 : 9 「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

#### 3. 神のことばとの調和

- (1) 祈る内容は、神のことばと調和していること
- (2) 調和とは、どういうことか？ たとえば、日々の必要を満たしていただくことを例にあげてみると・・・

① マタイ 6 : 11 と 6 : 25~34 には、神は私たちの日々の衣食住の必要を満たしてくださるという約束がある。この神の約束をそのまま受け取って、祈ることはよい。

② しかし、この約束をてこにして、「きょうは何を食べたい。こういう服を着たい」と、特定の願いをすとしたら、どうか？ そのような願いがかなえら

れるという保証は、聖書のどこにも書かれていない。

- ③ 私たちの日々の必要をどのように満たすのかは、神がお決めになることである。私たちは祈りの中で、神が私たちの日々の必要を満たしてくださることに信頼して祈る、同時にそれがどのようになされるのかは、神にゆだねる。これが、神のことばと調和した正しい祈りである。

(3) パウロの願いとそれに対する神の応答 (ロマ 1 : 9~10)

- ① パウロは、ローマに住む信者たちに会いに行けるようにと、長い間、祈っていた。
- ② この祈りが必ず答えられるという保証はなかった。「今度はついに道が開かれて」とあるように、それまで祈りは答えられてこなかった。
- ③ しかし、後日、パウロはローマに行くことになる。祈りは答えられたわけであるが、パウロが意図していたような形ではなく、囚人として行くことになったのであった (使徒 27 : 1, 28 : 16~31)。

(4) ヤコブ 4 : 15 「むしろ、あなたがたはこう言うべきです。『主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。』」

- ① 主のみこころなら・・・神は、そのみこころを必ず成就される。同時に、神が事を成すとき、神はその知恵と愛とにおいて事を成される。私たちはこのような神に信頼を置き、どのような方向に事が動いていこうとも、それが自分の望まない方向にあるように見えても、すべての物事が神の御手のうちにあることを疑わない。
- ② 私たちは祈りの中でいろいろな願いを神に申し上げる。私たちは、神が私たちの祈りを聞いてくださり、祈りに応答してくださると確信している。しかし、私たちの祈りに神が縛られるわけではない。私たちが願ったとおりに事を動かす義務は、神にはない。どのような方法で私たちの祈りに答えるかは、神が決めることである。
- ③ 私たちは、神にいろいろな願い求めを祈る。しかし同時に、それらに対して神がどのように答えてくださるかは、神にゆだねる。このバランスが大切である。これが神に信頼するということである。

4. 「願う」と「ゆだねる」とのバランスについて教える聖書箇所 ヤコブ 4 : 2~3

- ① 2節 「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです」
- ② 3節 「願っても受けられないのは、悪い動機で願うからです」
- ③ 悪い動機で願うとは・・・もし私たちが祈りの中で特定の願いを持ち出し、そのうえ、神にそのとおりにしてもらおうことを期待する、あるいは要求する



としたら、それが「悪い動機で願う」ということである。

- ④ 「神にそのとおりにしてもらうことを期待する、あるいは要求する」とは反対の立場が、「ゆだねる」である。祈りの中で願いを申し上げる。同時にそれに対して神がどのように答えてくださるのかは、神にゆだねる。
5. 怒りや不満を含む祈りは受け入れられるのか？ 答えは「受け入れられる」
- (1) ヨブ 10 : 1 「私は自分の不平をぶちまけ、私のたましいの苦しみを語ろう」  
個人的な祈りの中で、自分の怒りや不満を神に申し上げることは、全く問題ない。
- (2) ヨブ 21 : 15 「全能者が何者なので、私たちは彼に仕えなければならないのか。私たちが彼に祈って、どんな利益があるのか」  
ヨブは、このように不満を率直に語っている（補足：聖書の訳によっては、15節を14節からの続きで、不信者のせりふとしてしているものがある）
- (3) エレミヤ書を見ると、預言者エレミヤは、数多くの祈りをしている。その中でも、不平や落胆を言い表している祈りがいくつもある。
6. 個人的な祈りの手本・・・詩篇には、個人的な祈りが数多く収録されている。その中から、いくつかの例を見る。
- (1) 詩 17 : 1～15 ダビデの祈り 「(助け出してください) 主よ。人々から、あなたの御手で。相続分がこの世のいのちであるこの世の人々から。彼らの腹は、あなたの宝で満たされ、彼らは、子どもらに満ち足り、その豊かさを、その幼子らに残します。しかし、私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」(14～15節)
- ① 下線部は、ツェデク「義、正しさ」。共同訳では「義にあつて」
- (2) 詩 86 : 1～17 ダビデの祈り 「主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように」(11節)
- (3) 詩 90 : 1～17 神の人モーセの祈り 10～12節
- (4) 詩 102 : 1～28 その表題は、「悩む者の祈り。彼が気落ちして、自分の嘆きを主の前に注ぎ出したときのもの」
- (5) 詩 142 : 1～7 ダビデがサウルに追われて洞窟にいたときの祈りである
- ① 2節「私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表します。」
- ② 3節 「彼らは私にわなを仕掛けている・・・私の逃げる所もなくなり、」
- ③ 7節 「正しい者たちが私の回りに集まることでしょう」
- Iサム 22 : 1～2 400人
  - Iサム 30 : 9 600人 (I歴 12 : 1～21)
  - I歴 12 : 22～38 神の陣営のような大陣営となった